



先進国で日本だけ未導入

オリンピックとの関係もあるのか、サマータイムの制度がにわかには注目を浴びている。サマータイムとは、日の出が早い夏の間、太陽に合わせて早く起きて活動してもらうための制度だ。

学校の始業時間や会社の出社時間を夏の間だけ1時間早くするようには、それぞれの組織や地域が対応するのも一つの方法だろうが、現実にはそれを徹底させることは難しい。混乱も予想される。そこで、時計の針を一斉に動かすことにする、というのがサマータイムの制度だ。

伊藤 元重 (国際経済学) 学習院大教授

欧米のケースをみると、3月の中旬に時計の針を1時間進める。つまり、これまでの朝の6時は、針を動かすことで7時になってしまふ。これまでと同じように時計の6時に合わせて起床しようとする、実際には冬時間の5時に起きることになる。そして11月の初旬に針をまた1時間戻して冬時間

サマータイムで働き方改革

にする。夏の間、太陽に合わせて早くから活動を開始すれば、夕方の時間帯はまだ太陽が高い位置にある。夏時間などの時近くまで外は明るい状態なので、エネルギーの節約になる。こうした理由で、欧米の先進国はごく一部の例外を除いて、サマータイムの制度を採用している。日本だけが、先進国の中では例外だ。ちなみに、アジアやアフリカや南米などの途上国は、ほとんどサマータイムの制度を導入していない。なぜ、先進国と途上国の間にこれだけ顕著な違いがあるのか分からないが、これが実態である。

猛暑の夏に朝早くから活動することは省エネになるかもしれない

が、また太陽が高い位置にあるときに仕事を終わらせても、それから後の自宅での冷房代が増える、という意見もある。ただ、サマータイムが3月中旬から11月初旬まで実施されると考えれば、この期間全体を通しての省エネ効果は大きいようにも思える。日本も温暖化ガス排出の抑制にしっかりと対応するという意味でも、オリンピックのレガシーとして、サマータイムの導入ができればよいと思う。

家族や友人と楽しい時間

私が初めてサマータイムを経験したのは、米国に留学したときだ。23歳であった。サマータイムのおかげで、夜の時ごろまで明るい。夕方6時ごろまでに大学院の課題をいろいろこなし、そのあとに友人と野外でバーベキューを楽しんだことを思い出す。その時に感じたのは、サマータイムで1日が2回あるようだ、ということだ。

*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。無断転載、複製を禁じます。